

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:70.

再入院の糖尿病患者の家族における患者支援の意識

前田 桃香, 櫻澤 理美

再入院の糖尿病患者の家族における患者支援の意識

キーワード：糖尿病、再入院、家族支援

○前田 桃香、櫻澤 理美

旭川医科大学病院、進藤病院

I. 研究目的

2型糖尿病では、自宅での食事療法や薬物治療が重要となるが、それらの療養生活が適切にできず、再入院になる事例が少なくない。本研究では、患者が自宅で家族のサポートを受けながら疾患管理を継続するための看護師の支援について検討するために、再入院の糖尿病患者の家族における患者支援の意識を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象

2型糖尿病と診断され、A病院B病棟で2回以上入院をしている患者の家族3名。

2. 研究期間：2015年7月～2016年1月

3. 研究方法：質的記述研究法（半構成的面接法）を用いた。入院時に付き添っていた家族を対象とし、退院前に面接を行った。

4. 分析方法：インタビューガイドを独自に作成し、半構成的面接で得られた逐語録から、コード化し、類似したものをカテゴリー化し分析を行った。

III. 倫理的配慮

研究目的、方法、研究への協力は任意であること、同意の撤回が可能であること、学会等で公表する際には個人情報保護などを口頭および文書で説明し同意を得た。なお、本研究は研究者の所属する施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結果

分析の結果、7つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーは、「再入院に対して抵抗がない」などの【再入院へ対して危機感がない】、「忠告を聞いてくれない」という【諦め】、「患者への不満」「疾患管理から目を背けたい」などの【家族が持つ否定感情】、「食生活に介入することへの抵抗」などの【葛藤】、「糖尿病という疾患への認識」など【日常化した疾患管理】、「内服管理の難しさ」など【糖尿病管理の困難感】、「食事の知識不足」など【知識不足】であった。

V. 考察

今回の対象者は自宅で患者がインスリン自己注射を行う姿を見て、糖尿病管理を【日常化した疾患管理】と感じていた。疾患管理が日常化することで、「疾患管理への無関心」を抱き、家族の【再入院へ対して危

機感がない】状態へつながっていた。危機感をもてないことが、再入院を契機とし、患者の健康管理をしていくという意識変容に至らない要因と考えられた。

糖尿病患者は食生活をはじめとして、今までの生活習慣の修正・変更が求められる¹⁾が、家族は患者の食生活に対して、介入や助言をすることでの関係性の悪化や衝突を避けたいという【葛藤】を抱えていた。また患者は高齢であり残りの人生の質を確保してあげたいという【葛藤】もあった。これらの想いが具体的なサポートに踏み切れない要因となっているといえる。

加えて、家族は患者に対し、糖尿病管理について助言することや疾患管理への【諦め】の気持ちをもっていった。また、「疾患管理から目を背けたい」「患者に対する不満」など【家族が持つ患者への否定感情】をもっている場合もあり、これらの患者に対しての家族の想いが患者支援の意欲を低下させると考える。

一方、家族は、糖尿病の疾患管理を支援する上で食事療法に対する【知識不足】があった。さらに内服の複雑さや食事管理を難しいと感じていることが【糖尿病管理の困難感】を招いていたと考える。

以上のことから家族の想いに対しては十分に傾聴し、家族の限界や葛藤を受容した上で支援を行うことが重要と考える。また、看護師が家族と患者両者の想いを受容し、必要な支援を受けることができるようサポート体制の調整をしていくことも重要であると考えた。

VI. 結論

再入院する患者の家族は糖尿病管理を【日常化した疾患管理】と感じることで「疾患管理への無関心」が生じ、【再入院へ対して危機感がない】ことに繋がっていた。また、再入院患者の家族の想いとして、患者自身や疾患に対する【諦め】、【葛藤】、【家族が持つ患者への否定感情】があった。そして、治療の複雑さによる【糖尿病管理の困難感】と【知識不足】が家族のサポートを妨げていることに繋がっていた。それらの現状を理解し、看護師は患者、家族と共同し、目標を一致させながら介入していくことが重要といえる。

VII. 引用文献

1)池田 京子 西脇 友子：糖尿病患者の家族支援に関する研究 日本糖尿病教育・看護学会誌 Vol. 2 No2 P107 1998